



【プロフィール】

渡邊 義孝 (わたなべ・よしとか) 1966年生まれ。一級建築士、尾道市立大学非常勤講師。保線工、型枠工などを経て「アユミギャラリー・鈴木喜一建築計画工房」入所。2004年独立。住宅設計の他、民家再生、文化財調査などに従事。NPO法人「尾道空き家再生プロジェクト」理事。著書に「臺灣日式建築紀行」(時報出版/台湾)、「風をたべた日々」(日経BP社)、共著に「深刻化する『空き家』問題」(日弁連)ほか多数。



NPO尾道空き家再生プロジェクト

私は10年ほどで鈴木先生の事務所から独立しました。が、建築物の再生はライフワークとして続けています。私は現在、広島県尾道市内のNPO法人「尾道空き家再生プロジェクト」にも理事として参加しています。この団体は2007年に設立され、明治から昭和初期の良質な建物がたくさん残されている尾道の空き家を再生し、移住希望者を見出し、住みやすいように修繕して住んでいただく事業を行っています。空き家バンクの予算は尾道市が負担しています。このような仕事は、建築学科のない尾道市立大学で非常勤講師として建築学を教えることになりました。学生には再生した尾道市内の建築物などを見せ、フィールドワークの大切さも教えています。

台湾の日本式建築に大きな関心

12.25(水)

台南 始興、ホテルタリシにて7時起床。バスタクシーで立派な宿舎のある荷物を残したまま、タクシードルミで街の水交社へ急ぐ。快晴、日差しは痛いほど、まさに常夏の地だ。文創園区は本日オープン、臨時駐車場や仮設トイレなど、一大フェスティバルの雰囲気。展示館の対面へ描いている。母子2人の親子連れが話しかけてくる。すに「あなたは本を出したんです？」と日本語に。京都留学経験のある母親は、拙著と読んでくれたという。「で、あの本では、台南のページが少なかったですよね。どうしてか聞いて欲しいなあ」と笑う。更に年配の女性が「中日交流協会の日式房子多い」「天公廟壁壁を見なさい」とアドバイスを、そしてダンスをプレゼントしてくれた。戦間機(94G-II)実機が屋外に置かれている。本道(のみ)の宿舎ではなく、外壁煉瓦造の平屋がメインなの。『日式』のイメージとはちよと異なる。2004年に上級武官用宿舎8棟を

水交社 SHUEI JIAO SHE Cultural Park 25

市定古蹟に指定し、2013年に修復・活用プロジェクトを開始。2016年から工事を進めてきた。総工費3億NTDとのこと。陳信安局長に挨拶して、主題館という南端の建物を見学。

▲主題館 見学済

アーティストが元住民を招いて「記憶」を採集。日本海軍時代、中華民国空軍時代それぞれの歴史を、写真、建築、映像、食、文学を通じて伝えている。1992年のビデオを「食べ物」展示「動的に」見せている!

防空壕 (RC)

水交社 眷村主題館

平面図

26

時代の建築物、現地でいう「日式建築」に大きな関心を持ちました。写真や録音などのほか、ノートにはスケッチも添え、見聞したことに強い関心を持っていました。

台湾で、台湾だけでなく、世界各地でスケッチの記録を残しています。2019年に出版した『臺灣日式建築紀行』は日本語の原稿を翻訳したのですが、日本語による日本語版は出版されていません。また、現在も台湾で2冊の本の出版作業が進んでいます。

すてきな建物に出会ったからと言って、いつかこんなことをする訳ではないが、**台湾文学館(旧台南州庁)**だけは、ファサードをしっかりとスケッチしてみたかった。4日目の鉛筆で何度も下書きを道して、石の目地まで入れてみて、はじめてぼくは建築とじっくりと対話した気がした。四方からすばまいた優しいマンカドール(折れにくい(てどう呼ぶ?)のために、モ出隅コナへの円形の塔 やわらかな曲線の屋根 700ヶパペルメト歯磨剤ヒドム屋根

台湾文学館

国立台湾文学館 National Museum of Taiwan Literature

1909年 廢県置庁、台南府誕生

1913年 上棟

1916年 台南府庁舎として竣工

1920年 廢庁置州により台南州に以降台南州庁舎として使用

1945年 台南空襲で破産

1949年~ 中華民国空軍供応司令部

1969年~1997年 台南市政府

1997年 文化資産保存研究中心

2002年 修復完了、2003年 文学館

瓶形欄杆柱

ニメタルで威厳を保ちながら、どこかソフトな印象を与えている。半円アーチを水平のマグサを、これに過大なほどの要石(キーストーン)を載せてアクセントとする。古典引用のボキャブリーは数多く、美しいものが濃く強い陰影を備えておりながら、絶妙な西位置と比例の大きな交響曲に仕上げています。これだけの「凍る音楽」といえるだろう。リバーソンの大胆に新旧をぶつけ合い、ダイナミックで開放的な展示空間を創りあげている。官庁が文学館に再生、文学と識ることは、複雑で苦難な道。台湾の歴史を知ることに他ならない。この場所が「安眠阿嬤相識」を見たこと、忘れることができない。ここに柱がないです。窓に3層目しているんです

内側の階段を見下ろす! 手すりのカブト、手すり親柱、手すり子柱は!

森田松之助

現在、台湾社会では「日式建築」を守ろうという風潮が広がっている。渡邊さんのノートは、台湾で『臺灣日式建築紀行』として出版され、戦後台湾において長く忘れられた日本式建築の美しさを多くの方に気付かせるきっかけを作っている。上の4点のスケッチは、台湾西南部の台南市を訪れた時のもの(渡邊義孝さん提供)

歯も痛んでからの修繕は大変「日常的な付き合い」が大切

渡邊先生が考える歯科と建築の共通点をお聞かせください。

建築物の9割は、いわゆる「新築」です。残る部分の一握りが再生とリノベーションです。しかし、歯科医師との共通点から見ると、リフォームや再生というマイノリティ(minority)の部分が多さに共通点になると思います。つまり、建築物の場合、建物の一部が痛んでいる、雨漏りがある、耐震性が弱い、家族が増える

歯の状態に近づけるための治療がはじまる。そのため

に必要なのは本人の希望、環境、用いる素材などを整理するはず。この流れは、建築の再生と歯科の世界では非常に似ている部分であると思います。

日常生活やお仕事を通じて歯科、歯科医療について、感じられていることを

私は、歯科の「治療」には一生行かないと決めています。歯に痛みを覚え、治療することにならないよう、半年に1回は歯科診療

所に行き、クリーニングやメンテナンスを受けに行っています。先生も歯科衛生士さんも丁寧にしてもらえるので、居眠りしてしまうこともありません。サウナに行くような気分でも歯科診療所に行っています。つくづく感じるのですが、やはり歯科は建築に似ています。どのような家でも修繕は必要。痛んでから修繕したのでは、大変な作業と労力とお金が必要になります。何でもない時からチェックを受け、屋根や雨どいも入念な手入れを行う。そのためには、大工さんなどの日常的な付き合いが、非常に大切。歯科でも痛む前のメンテナンス、そして「日常的な付き合い」が大切だと思えます。良い歯科医師とスタッフに出会い、付き合っていくことが大切だと思えます。

群馬県太田市内の歯科診療所ですが、古民家再生の形で設計を担当したことがあります。独立する前、事務所のスタッフとしての仕事でした。歯科診療所は、患者さんが独特な無防備状態に晒される場所です。そのため、患者さんが落ち着くことができる、極力ストレスを受けないことを大切にすることをコンセプトとして設計しました。古民家再生はそのためにも適しており、天井も屋根までの吹き抜けとし、高さを出して圧迫感をなくすなどしました。現在では、機能性と思者さんのプライバシー保護など、いろいろな点への配慮が必要。す。

最後に、大切にされている言葉を紹介します。『更上一層楼(こうじょういっそうろう)』です。中国の詩人、王之渙が詠んだ漢詩「登鶴鵲樓(かんじやくろう)のほろ」の一節で、鈴木先生のアトリエの階段に掛かっていた言葉です。その意は、「遠くまで見渡すなら、もっとう上に登る必要がある。物事を広く識るには、努力して自分を向上させる必要があり、向上すれば広い視野で周りを見渡すことができるようになる」というもの。本日はお時間を割いていただき、ありがとうございました。(ア)

■インタビューについてのご感想は、info@tokyo-sk.comへお寄せください。過去のインタビューは当協会HPからご覧いただけます。